右紙面之通、先年御觸之通候得共、久敷儀に候間、彌以無相違此趣相守候樣に、御家中一統可申觸候之旨被仰出候。只今御改作御奉行手合分は無之候得共、右御紙面請申候。御自分之儀は不及申、御組中ゟも急度御申渡可有之候。以上。

（延寶二年）寅五月六日　　御算用場

四一　花火停止之儀觸

花火御停止候間、居屋敷之儀は勿論、其外於所々花火不仕候樣、急度可被申觸候。以上。

七月九日　　前田對馬
奥村因幡
津田玄蕃

四二　家作・婚禮等之儀御定

居屋敷長屋之端矢倉仕候儀、御停止に候。最前被仰出候、惣而作事不應分限、華麗之躰不仕、彌輕々と普請可申付之由御意候間、此旨御組中ゟ可被仰觸候。以上。

七月十日　　前田對馬
津田玄蕃
奥村因幡
在江戸
今枝民部

一、家作は二間梁に過べからず。但、長屋二間半梁、臺所は三間梁も不苦。庇は六尺に限るべし。古家を作直候共、右之間數を可用事。

附、なげし作・杉戸附書院停止。并くしがた・床緣其外さん・かまち等塗候儀無用たるべし。金銀繪座敷又は手ごもりたる儀、一切仕間敷事。

一、床ぶち・棚など唐木之類無用之事。

一、長屋塀下石垣之儀、人持之歴々たりといふとも、向後於築直は、川石・鷹栖石・宇川石之類、此外にも勝手に能石を以、野づらに可致事。

附り、長屋腰板之儀、何木にても可致麁相事。

一、嫁娶之節手道具麁相成黒蒔繪、其外は蒔繪無用之事。

附、乘物三挺・長持五棹に過べからざる事。

一、年頭・歳暮・五節句・婚禮之刻、祝儀之音物・贈答無用。但、緣者親類之内は輕く取かはし可致事。

一、鷹所持之儀、跡々定置通たるべし。但、鷹は費有之間、人々可有其覺悟事。

附、無用之器物、惣而費成諸道具相調候儀、堅停止之事。

右之條々堅可相守之。若於相背輩有之は、急度可沙汰もの也。

寛文八年七月六日　御印

四三　家中振廻之儀御定

一、急度仕たる祝儀之振廻、并他國客人有之刻は、二汁五菜・香之物其外吸物・取肴一色、酒可爲三遍事。

一、常之振廻一汁三菜外香物、酒二遍之事。

一、後段之振廻無用。但、重菓子など出候儀は不苦事。

一、鶴・白鳥・他國肴・木具停止之事。

一、とりまぜ菜無用之事。

右之通堅可相守者也。

寛文八年七月六日

一、御家中振廻、燒物等二色皿に入被出儀、最前より盛交菜御停止之處に、何茂心得違と相見候條、向後不被出、其外御法度之品々急度被相守候樣、御組中ゟ可被仰觸候。恐惶謹言。

亥十二月十二日　　津田源右衞門
多賀左近

四四　行倒人等ためし物に仕儀停止御定

途中に行たふれ果候者、又は川に流死候もの有之刻、猥にためし物に仕候儀、堅御停止に候間、其心得被成、御組中ゟも可被仰觸候。以上。

萬治四年三月廿九日

四五　御留守出仕無用之儀觸

御留守中年頭、其外節々御禮日出仕、無用之旨被仰出候間、